

Title	知識社会学と自己反省 : K・マンハイムの保守主義論をめぐって
Sub Title	Wissenssoziologie und Selbstreflexion : zu Karl Mannheims Untersuchung des Konservatismus
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1987
Jtitle	哲學 No.85 (1987. 12) ,p.49- 77
JaLC DOI	
Abstract	Mannheim habilitierte sich im Dezember 1925 an der Universität Heidelberg mit seiner Schrift Altkonservatismus : Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens. Aber für seine Habilitationsschrift hielt man meistens seinen Aufsatz : Das konservative Denken (1927) in Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik und leider ist die Originalschrift Altkonservatismus nahezu unbeachtet geblieben. Natürlich ist Altkonservatismus eine empirisch-historische Untersuchung, in der Mannheim das konservative Denken in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts in Deutschland wissenssoziologisch interpretiert. Andererseits aber soll betont werden, dass Altkonservatismus zugleich eine Selbstreflexion ist, die sich die der Wissenssoziologie zugrunde liegende politisch-ideologische Unterlage historisch klarmacht. Das kann in Mannheims Darstellung von den konservativen Denkern, insbesondere A. Müller, Savigny, am klarsten gesehen werden. Unter Berücksichtigung von dieser Selbstreflexion als einem eigenartigen Zug der Originalschrift versuche ich, im vorliegenden Aufsatz, drei wichtige Aspekte der Originalschrift zu untersuchen, d.h. Mannheims methodologische Fragestellung als Selbstreflexion (Kap. II), den hermeneutischen Charakter der Mannheimschen Analyse (Kap. III) und seine historischsoziologische Darstellung der konservativen Denker als ein Ergebnis der Selbstreflexion (Kap. IV).
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 知識社会学と自己反省

—K・マンハイムの保守主義論をめぐって—

澤 井 敦\*

## Wissenssoziologie und Selbstreflexion

—Zu Karl Mannheims Untersuchung des Konservatismus—

*Atsushi Sawai*

Mannheim habilitierte sich im Dezember 1925 an der Universität Heidelberg mit seiner Schrift *Altkonservatismus: Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens*. Aber für seine Habilitationsschrift hält man meistens seinen Aufsatz: *Das konservative Denken* (1927) in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* und leider ist die Originalschrift *Altkonservatismus* nahezu unbeachtet geblieben.

Natürlich ist *Altkonservatismus* eine empirisch-historische Untersuchung, in der Mannheim das konservative Denken in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts in Deutschland wissenssoziologisch interpretiert. Andererseits aber soll betont werden, daß *Altkonservatismus* zugleich eine Selbstreflexion ist, die sich die der Wissenssoziologie zugrunde liegende politisch-ideologische Unterlage historisch klarmacht. Das kann in Mannheims Darstellung von den konservativen Denkern, insbesondere A. Müller, Savigny, am klarsten gesehen werden.

Unter Berücksichtigung von dieser Selbstreflexion als einem eigenartigen Zug der Originalschrift versuche ich, im vorliegenden Aufsatz, drei wichtige Aspekte der Originalschrift zu untersuchen, d. h. Mannheims methodologische Fragestellung als Selbstreflexion (Kap. II), den hermeneutischen Charakter der Mannheimschen Analyse (Kap. III) und seine historisch-soziologische Darstellung der konservativen Denker als ein Ergebnis der Selbstreflexion (Kap. IV).

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学専攻)

## I. はじめに～三つの保守主義論

認識論にかかわる知識社会学の理論に比べて、マンハイムの保守主義論は、従来、比較的高く評価されてきた<sup>1)</sup>。彼の保守主義論が、知識社会学の方法を実際に適用した経験的研究であること、しかも実り多い経験的研究であることが、高く評価される理由であろう<sup>2)</sup>。しかしながら、本稿においては、マンハイムの保守主義論のもう一つの側面、すなわち、「知識社会学自体の基礎の自己反省」という側面に焦点をあてたいと思う。確かに、マンハイムの保守主義論は、19世紀前半のドイツの政治思想を知識社会学的に分析した経験的・歴史的研究である<sup>3)</sup>。しかし、また同時に、彼の保守主義論は、知識社会学自体の政治的・イデオロギー的基礎を歴史的に反省する、自己反省の所産でもあるのではないだろうか。この主張が、本稿のアルファであり、オメガである<sup>4)</sup>。

さて、マンハイムの保守主義論は、従来、「社会科学・社会政策アルヒーフ」に1927年に発表された『保守主義的思考』に限定されて研究されてきた<sup>5)</sup>。しかしながら、この『保守主義的思考』は、1925年12月にマンハイムが私講師資格取得論文としてハイデルベルク大学に提出した、『旧保守主義：知識の社会学への寄与』の約半分を削除し、加筆したものである。また、これとは別に、マンハイムは、1947年、死の直前に自ら改訂を行い、英語版の『保守主義的思考』（以下、『英語版』）を発表している<sup>6)</sup>。これら三つの保守主義論は、重複する部分もあるものの、各々、長さにおいて、また内容的に相異なるものである（表1参照）。長さの面では、『旧保守主義』が、三つの論文の中で最も大部である。また、内容的には、従来の『保守主義的思考』では、他の二つの論文に（『旧保守主義』にのみ、あるいは両者に）含まれている以下の部分が削除されている。

1. 保守主義論の背景としての一般的な歴史的・社会的問題を論じた部分（『旧保守主義』、『英語版』）。この部分については、『旧保守主義』に比

表 1

<p>旧保守主義：知識の社会学への寄与 (1925)</p> <p>第一部 一般的問題</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 問題設定</li> <li>2. 歴史の問題とドイツ保守主義</li> <li>3. 近代の精神的・社会的現象の構造状況</li> <li>4. 近代の合理化の問題</li> <li>5. 非合理的なるものと社会的抵抗</li> </ol> <p>第二部 保守主義の本質と概念</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝統主義と保守主義</li> <li>2. 政治的保守主義の概念に関する批判的・歴史的補論</li> <li>3. 保守主義を成立させた社会学的布置状況の分析</li> <li>4. 保守主義的思考の形態学             <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 保守主義的思考の基礎志向の分析</li> <li>b. 保守主義的思考の理論的中心</li> </ol> </li> </ol> <p>第三部 ドイツにおける旧保守主義的運動の階層と構成及びその思考様式の生成</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ロマン主義的・身分主義的立場</li> <li>2. 「歴史学派」の思考立場</li> </ol>	<p>保守主義的思考：ドイツにおける政治的・歴史的思考の生成についての社会学的考察 (1927)</p> <p>序文</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝統主義と保守主義</li> <li>2. 保守主義を成立させた社会学的布置状況の分析</li> <li>3. 保守主義的思考の形態学 (1925年版のa.のみ)</li> <li>4. ロマン主義的・身分主義的立場の階層と構造</li> </ol>	<p>保守主義的思考 (1953)</p> <p>序説</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 思考様式</li> <li>2. 思考様式とその社会的背景</li> <li>3. 「基礎志向」</li> <li>4. 具体例：19世紀前半のドイツ保守主義</li> </ol> <p>第一部 近代合理主義と保守主義的抵抗の出現</p> <p>第二部 保守主義の意味</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝統主義と保守主義</li> <li>2. 近代保守主義の社会学的背景</li> <li>3. 保守主義的思考の形態学             <ol style="list-style-type: none"> <li>a. 保守主義的思考の背後にある基礎志向</li> <li>b. 保守主義的思考の理論的中心</li> </ol> </li> </ol> <p>第三部 ロマン主義的・封建主義的保守主義の社会構造</p>
---	--	--

べて、『英語版』は短縮化され、方法論的概念の説明により重点が置かれている。

2. 「政治的保守主義の概念に関する批判的・歴史的補論」(『旧保守主

義』).

3. 「保守主義的思考の理論的中心」(『旧保守主義』, 『英語版』).
4. G・フーコー, F・V・ザヴィニーを中心とした「歴史学派」の歴史的・社会学的分析(『旧保守主義』).

本稿では、『旧保守主義』, その中でもとりわけ従来の『保守主義的思考』では削除されていた上述の部分を中心として, 論述を進めていく. 論述の進行は以下の通りである。

II. 保守主義論の問題意識

III. 保守主義論の分析枠組み

IV. 自己反省としての歴史的・社会学的分析

そして, とりわけ II と IV では, マンハイムの保守主義論が自己反省の所産でもあるという事実を具体的に明らかにしていく。

## II. 保守主義論の問題意識

1925年の『旧保守主義』以前のマンハイムの思想経路は, 青年期の文化論を経て, 認識論の批判, 文化社会学の構想, さらに存在拘束的思考の基礎づけ=動的形而上学の形成へと至るものであった. この思想経路からすると, マンハイムの次なる課題は, 動的形而上学, あるいは動的な歴史哲学の精緻化ということになるだろう. しかしながら, 実際のところマンハイムが取り組んだのは, 保守主義論というきわめて経験的・歴史的な研究であった. 何故マンハイムは, あえて「保守主義」に取り組んだのであろうか. しかも, 何故, 「19世紀前半のドイツ」の保守主義なのであろうか. 本章においては, この二つの疑問に答えることを通じて, 保守主義論におけるマンハイムの問題意識を明らかにしていく。

## 1. 何故「保守主義」なのか？

『旧保守主義』がハイデルベルク大学に提出される一年前、1924年の『歴史主義』において、マンハイムは、「静的思考」と「動的思考」の対立を問題としていた。その際、「静的思考」が文化あるいは人間の内に超時間的で普遍的な妥当性を有する領域を設定する（例えば、新カント学派の形式的な文化価値、あるいは啓蒙主義哲学の人間理性）思考であるのに対して、「動的思考」は、動的で生成してやまない生の総体性を究極的所与とみなす思考であった（WAW 246-262）。また、同じ1924年に書かれた草稿、『文化とその認識可能性についての社会学理論』では、「接続的（konjunktiv）思考」と「伝達的（kommunikativ）思考」の対立が問題とされていた。そして、「接続的思考」は、特定の接続的な経験空間（Erfahrungsraum）に拘束された、またそれと共に変化する、同じ経験空間に参加している者にのみ伝達可能な思考であり、他方、「伝達的思考」は、接続的な経験空間を相互に関係づける、より抽象的で普遍的な妥当性を有する思考であった<sup>7)</sup>。ここでマンハイムの言う二つの思考の対立は、簡潔に言えば、存在拘束的な思考と存在拘束的でない思考の対立であり、マンハイム自身は、言うまでもなく、「動的思考」、「接続的思考」、すなわち存在拘束的思考の立場をとる。

より一般的に言えば、以上でのべた二つの思考の対立は、自然科学的思考と精神科学・歴史科学的思考の対立と行うことができるだろう。そして、『旧保守主義』の出発点は、まさしく、「いつから我々は（少なくとも問題として）この「自然」と「歴史」の対立を有しているのか」（K 50）という問題であった。ただ、その際、マンハイムは、この対立を単なる思考の形式・方法論の上での対立とは見なさず、むしろ、各々の思考の背後にある「世界観」の対立と見なす。そして、さらに、世界観が特定の人々によって担われるものである以上、世界観の対立は、社会的な諸力の対立と関係づけられる。このような観点からすると、上述の「自然」と「歴史」

の対立の発端は、ドイツにおいて、フランス革命の影響下にある19世紀前半の政治的・イデオロギー的闘争に見いだされる。その結果、二つの思考の対立は、「自由主義的思考と保守主義的思考の対立」(K 51)、つまり、フランス革命に迎合する自由主義的思考とそれに対する意識的な反発・防衛としての保守主義的思考の対立としてとらえ返されることになる。マンハイムの言葉を借りれば、「19世紀の前半のドイツにおいて、社会的・政治的分化と平行して、思考様式の分化が生じる。この分化は、様々な変化があったにせよ、いまだ持続しており、そして、この分化からのみ、今日方法論的地平に現れている、自然科学的思考と歴史的思考の区別が発生論的に理解されうるるのである」(K 52)<sup>8)</sup>。

このように、自然科学—自由主義、歴史科学—保守主義という関係づけがなされるわけであるが(マンハイム自身の思考はもちろん、後者に属することになる)、思考の形式・方法論を政治的实践に直接関係づけることに対して疑問が生じるかもしれない。マンハイム自身も、思考の様式・方法論が形成される上で政治的要素が最も根本的な原因となる、と主張しているわけではない。マンハイムが問題とするのは、あくまでも、思考の背後にある「世界観」である。この世界観は、政治的志向と比べると、確かに、より包括的なものである。しかし、近代の発展において特徴的であるモメントは、「17世紀に始まり19世紀に絶頂に達する、政治的要素がますますイデオロギー的コスモスの中の諸潮流の結晶点になるという事実」(K 69)である。つまり、マンハイムによれば、近代において世界観は、政治的なるものから最も明確に把握することができるのである。また、研究の対象となる19世紀前半のドイツにおいては、「政治的なるものが、事実、様々な世界観上の思考の立場の凝集点となっていた」(K 79)のである(この点については、次節で補足する)。

さて、「自由主義的思考と保守主義的思考の対立」という問題設定の背景には、より一般的な問題、すなわち、「近代の合理化とそれに対する社

会的抵抗」という問題がある。前者の問題には、上述のように、フランス革命が、後者には、当時の産業革命が深くかかわっている。近代の合理化の進行にともなって、「非合理的なるもの」は、二つの意味でますます生活の周縁に押しやられる。まず第一に、個々人の生活において、「非合理的なるもの」は、職場、市場、政治等の公的領域に浸透する合理化によって、私的で親密な人間関係においてのみ保持されるようになる。また、第二に、社会学的階層という側面において、「非合理的なるもの」は、合理化をになう階層の周縁、つまり、農民、貴族、小ブルジョアの生活の伝統においてのみ保持されるようになる。そして、この「非合理的なるもの」を取り戻そうとする運動、すなわち、ブルジョア的資本主義に対する政治的・社会的な「右の抵抗」が保守主義的思考の源流である。この「抵抗」は、精神的レベルでは、ブルジョア合理主義に対するロマン主義の運動として現れた。マンハイムの保守主義論は、資本主義に対する政治的・社会的抵抗が、どのようにして「対抗論理」の形成にまで至るのかを明らかにするという射程を含んでいる。<sup>9)</sup>

さて、本節の題目に掲げた問題に対して解答を呈示しておこう。マンハイムが、「保守主義」を研究の対象に選んだのは、「歴史的思考」、さらにはマンハイム自身の知識社会学の政治的・イデオロギー的系譜を、19世紀前半の保守主義的思考にさかのぼることによって、歴史的・発生論的に明らかにするためである。

## 2. 何故「19世紀前半のドイツ」なのか？

マンハイムが、保守主義論において「19世紀前半」に焦点をしばったのは、すでに述べたように、この時期に、フランス革命の影響により、ドイツにおいて自由主義的思考と保守主義的思考の対立が生じたからである。普遍的・心理学的な人間の本性としての「伝統主義」、変化を嫌い過去に執着する心性は、時代・場所を問わず、一般的に存在する。しかし、歴史

的・動的な構造連関としての「保守主義」は、敵対手の登場によって、はじめて意識的に形成される。まさに「19世紀前半」にフランスから押し寄せてきた自由主義的思考の波が、それに反発する保守主義的思考の形成を促したのである。

しかしながら、フランス革命の影響を受けたという点では、フランス本国はもちろん、イギリスも同様である。何故マンハイムは、19世紀前半の「ドイツ」に研究の焦点をしばったのであろうか。解答を先取りしておくならば、それは、「ドイツ」において自由主義的思考と保守主義的思考の対立が、論理的に最も首尾一貫した形で形成されたからであり、その結果、思考に対する社会的・政治的諸力の影響を範例的な形で観察することができるからである。マンハイムは、ドイツにおいてかの対立がきわめて明確に現れた原因として、1) 一般的要因、2) 社会学的要因、3) 地理的要因をあげている。まず第一の要因は、ドイツ的精神の哲学的・論理的天性である。ドイツでは、政治的・世界観的な重大事がおこると、それに対して即座に「行動」が起こるというよりは、むしろ、それについて哲学的・論理的に「考え抜かれる」のである。そして、第二の要因としては、実質的な議会、及び中間層が、当時、明確には存在しなかったということがあげられる。議会が存在すれば、そこで為される現実的闘争の結果、思想上の純粹性・徹底性は損なわれる。しかし、当時のドイツではむしろ、軍人階層を中心とした上流階層が力を握り下級階層を抑圧していた。また、中間層が存在すれば、それは、諸階層間の総合、釣り合いをとる上での中心を形づくる。しかし、当時のドイツでは、中間層自体が両極に分裂し、またその結果、諸党派間・諸階層間の相互浸透がさきほど生じなかった。さらに、第三の要因として、地理的要因があげられる。当時、ライン地方と南ドイツがフランスの直接的な影響下にあり、自由主義の本拠であったのに対し、プロシアとオーストリアは、まさに、保守主義の牙城となっていたのである。<sup>10)</sup>

さて、本節の題目に掲げた問題に対して、再び解答を呈示しておこう。マンハイムが「19世紀前半のドイツ」を研究の対象に選んだのは、19世紀前半にフランス革命の影響により、自由主義的思考と保守主義的思考の対立が、とりわけドイツにおいては特殊ドイツ的な状況によって明確に、はじめて現れてきたからである。さらに、マンハイムの保守主義論が、「知識社会学自体の基礎の自己反省」でもある、という我々のテーゼからすれば、彼が、自らの属する伝統の政治的・思想的分岐点にまでさかのぼることは、むしろ当然である。

以上の論述からも明らかであるように、一見するとドイツ政治思想史研究以外のなにものでもない保守主義論において、マンハイムは、まさに、彼が生きた時代の、二つの思考の対立、とりわけこの対立の一方の項である「歴史的思考」自体の歴史的・政治的起源を問題としていた。そして、さらに付言するならば、マンハイムの知識社会学が（少なくとも彼自身にとっては）、当時の歴史科学・精神科学の様々な潮流の「総合」の所産である以上、保守主義論における「歴史的思考」には、彼自身の知識社会学も含まれることになるだろう。保守主義論の問題意識は、まさに、「知識社会学自体の基礎の自己反省」なのである。

### Ⅲ. 保守主義論の分析枠組み

本章では、マンハイムの保守主義論の分析枠組み、つまり、経験的・歴史的研究に実際に適用された、知識社会学の分析枠組みの概要、及びその具体的帰結について簡潔にまとめておきたい。

#### 1. 解釈学的企図としての知識社会学

前章で述べたように、マンハイムが問題にするのは、様々な思考の背後

に存在する「世界観」である。そして、各々の世界観が有する一定の方向性を、マンハイムは、「基礎志向(Grundintention)」と呼ぶ。この「基礎志向」は、理論以前の体験の場、しかも個々人が組み込まれている「社会的体験連関」の内に脈打つ集合的な志向である<sup>11)</sup>。それ故、「基礎志向」は、通常個々人には反省されていない、無意識的なものである。さて、このような基礎志向に従い、様々な思考間に、一定の統一性、内的な形成原理の共通性が生じる。このような統一性、共通性を、マンハイムは、「思考様式(Denkstil)」と呼ぶ。芸術史においてゴシック様式、バロック様式といった一定の統一性がみられるように、思考の領域にも同様の統一性がみられるとマンハイムは主張する。

以上のように、「基礎志向」、「思考様式」といった概念を設定した上で、次に課題となるのは、ある特定の思想家の思想を、ある特定の思考様式、さらには基礎志向に帰属(Zurechnung)させることである。その際、手がかりとなるのは個々の思想の、いわば柱石となっている基礎概念(「自由」、「伝統」、「具体性」等)である。マンハイムによると、この帰属は、a) 帰属の意味的適合性の証明、b) 帰属の現実的・因果的適合性の証明という二つのレベルで行われる<sup>12)</sup>。a) においては、上で述べた基礎概念から、思考様式、さらには基礎志向が解釈され、b) においては、この基礎概念が実際に個々の思想家によって用いられているということが確認される。しかし、a) のみでは、帰属が、単なる構成、皮相な一般化にとどまる危険が存在する。また、b) のみでは、帰属が、使用された諸概念の統計の作成にとどまる危険が存在する。従って、帰属は、a) と b) の相互補完によって、はじめて達成される。

このような相互補完は、マンハイムも述べているように、「一方で、ある思考様式の帰属可能性を、この思考様式の現実的担い手から確定し(b)、他方で、特定の担い手の帰属可能性を彼の思考様式から明らかにする(a)(カッコ内筆者)」(K 59) という、一種の循環を含んでいる。芸術史にお

いても、一方で、ある様式を前提とした上で、個々の作品をこの様式へ帰属させ、他方で、この個々の作品は、様式に関する知識を豊かにするといった同様の循環がみられる。このような循環は、一種の解釈学的循環とみなされ得るだろう。

マンハイムが、思考の背後にある世界観、基礎志向を問題とする場合、それらを類型論的に、静的に固定してとらえることが目標とされているのではない。世界観、基礎志向は、なんらかの形而上学的実体として存在しているのではなく、諸個人間の、たえず移り変わる体験連関の内に実現されていたものである。マンハイムの意図は、このような世界観、基礎志向を、「動的に」ととらえることである。つまり、一方で、たえず移り変わる体験連関の内から一定の方向性（基礎志向）を取り出し、他方で、体験連関の内から実際に生じてきた概念、その用いられ方にたちもどり、最初に取り出した方向性が、現実に適うものであるかどうかを確認し、また再び基礎志向の解釈に向かう……という解釈学的な循環を経て、世界観を把握しようとするものである。<sup>13)</sup>

さらに、保守主義論の分析枠組みは自己反省的でもある（自己反省性は、解釈学的思考の一つのメルクマールである<sup>14)</sup>）。1921年の『世界観解釈の理論への寄与』の中で述べられているように、「ある時代の精神、世界観は、（その時代に生きた人々の立場からのみならず）理解する主観の実質からも把握されるなにものかである。それ故、過去に関するドキュメンタ的解釈（世界観解釈）の歴史は、解釈する主観の歴史をともに含んでいるのである（カッコ内筆者）」（WAW 128-129）。マンハイムは、自らの立場自体もまたある歴史的伝統、基礎志向に帰属していることを承認している。それ故、同じ伝統に属する旧保守主義を解釈することが、同時に、自己反省、自己理解へとつながるのである。

## 2. 保守主義的思考の意味的・解釈学的分析

前節で述べたような、二つのレベルの帰属を通じて行われる分析を、意味的・解釈学的分析と呼ぶことにしよう（ただし、マンハイム自身はこれを「現象学的分析」と呼ぶ）。本節では、保守主義的思考の意味的・解釈学的分析を通じてマンハイムが導き出した、具体的帰結をまとめておきたい。

前節でも述べたように、まず最初に対象とされるのは、保守主義的な思考様式を生成せしめる先理論的な基礎志向である。マンハイムは、自由主義的・進歩主義的思考との対比に基づいて、以下のような保守主義的思考の基礎志向を示している。すなわち、思弁的なもの・抽象的なもの・体系的なものの体験に対する「直接的に存在する個別的なものの・具体的なもの・質的なものの体験」、当為・規範からの体験に対する「現状の存在を運命として受容する体験」、現在を未来の始まりと見る直線的な時間体験に対する、「現在を過去の最後の段階としてとらえ現在と過去を融合する空間化的な時間体験」、「歴史の基体を個人から土地所有そのものへと置き換えること」、「階級等に対して有機的結合を優先させること」等である。そして、これらの基礎志向の核心は、歴史的事象を、現在なお生きている過去の内容、過去の体験中心から体験することにある（K 110-127; WAW 423-446）。

そして次に、以上のような基礎志向によって生成した思考様式の理論的骨組み、中心的問題が解明される。マンハイムは、ブルジョア的・革命的思考様式を体現する思考、つまり、普遍妥当的な理性から導き出される自然法を前提とする自然法的思考との対比に基づいて、以下のような要素を示している。まず、「内容的」には、自然法的思考が、自然状態、社会契約、主権在民、また、自由・所有・安全・抵抗権等に関する人権を主張することに対する攻撃である。そして、「形式的な思考方法」においては、1) 思考（理性）に対する「存在（歴史、生、民族）」の対置、2) ある原理

からの演繹に対する「現実の非合理性」の対置, 3) 普遍的妥当性に対する「個性」の重視, 4) 政治的革新の一般的応用可能性に対する「有機体の思想」, また, 「質的なもの」の重視, 5) 個人から出発する原子論的・機械論的な法・国家・民族観に対する「総体性 (Totalität) から出発する思想」, また, 分析に対する「総合」の対置, 6) 静的思考に対する「理性に関する動的な考え方」である (K 127-136; ESSP 116-119).

### 3. 保守主義的思考の歴史的・社会学的分析

以上で述べた意味的・解釈学的分析で, 知識社会学的分析が終了するわけではない。知識社会学が知識「社会学」たる所以は, 意味的・解釈学的分析が, 以下で述べる, 歴史的・社会学的分析によって補完されるという点にある。

歴史的・社会学的分析においては, 意味的・解釈学的分析で体系的に分析された基礎志向, 思考様式が, 特定の歴史的な生活空間の中で, 特定の思想家に担われて, どのような形で具体的に生成したのかが分析される。その際, マンハイムによると, 歴史的な生活空間は, 1) 精神的世界の社会的担い手, すなわち, 「社会的階層」, 2) 後の生成の出発点となる, 生活空間の「伝統」, 3) 生活空間がある特定の時代に経験する特定の運命, すなわち, 「世代体験」によって特徴づけることができる。また, マンハイムは, 論述に先立って, 旧保守主義の様々な思考潮流の総合, 結節点として重要視される, 八つの「思考立場」を確定している。つまり, 身分主義的思考とロマン主義的思考の総合, 歴史学派の創始, ヘーゲル, 政治週報派, メッテルニヒの立場, シュタール, 後期歴史学派, 後期ロマン主義である (なお, マンハイムは, 様々な思考潮流, 及びその結節点の関係を図式化している<sup>15)</sup> 表2参照)。しかしながら, マンハイムが保守主義論で主に取り扱ったのは, ロマン主義・身分主義的立場の J・メーザー, A・ミュラー (『旧保守主義』, 『保守主義的思考』, 『英語版』), 歴史学派の

表 2

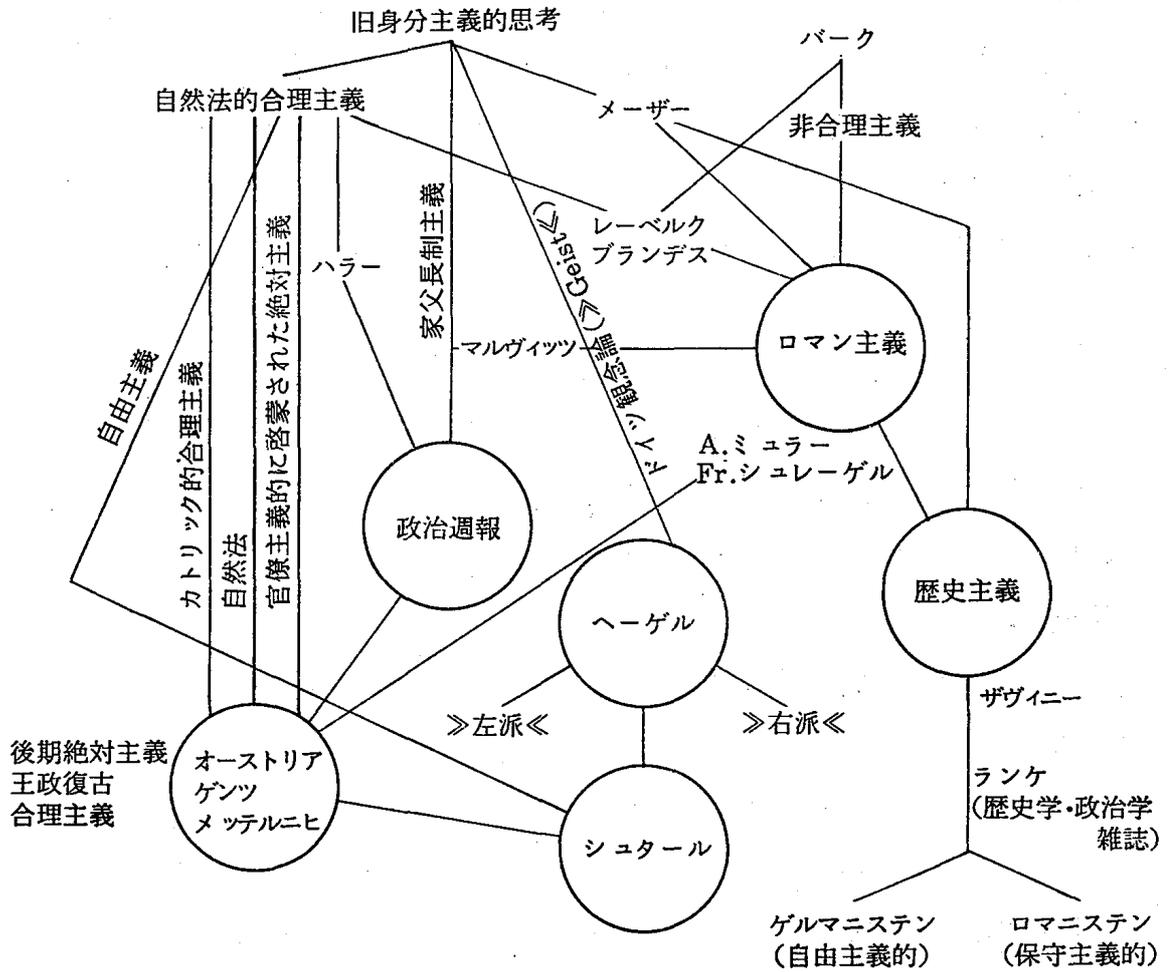
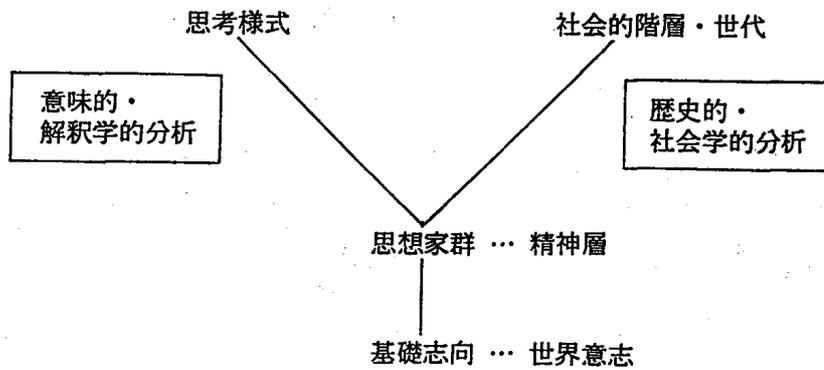


表 3



G・フーコー、F・V・ザヴィニー（『旧保守主義』）といった四人の思想家、とりわけ、ミュラーとザヴィニーであった。ヘーゲルについては、予告にとどまっている。マンハイムは、上述の四人の思想家が、いかなる社会的階層・世代に属していたのか、また、互いにいかなる関係にあったのか、その結果いかなる思想を形成し、展開していったのかを具体的に記述していく。

最後に、以上で概観してきた保守主義論の分析枠組みを図式化してまとめておこう（表3参照）。一方で、個々の思想家の思想の意味的・解釈学的分析（二つのレベルの帰属）を通じて、保守主義的思考の思考様式、基礎志向が分析される。また、他方で、個々の思想家の社会的階層・世代等の歴史的・社会学的分析を通じて、意味的・解釈学的分析の結果が具体化・厳密化される。『旧保守主義』と同じ1925年に発表された『知識の社会学の問題』における術語に置き換えるならば、同じ思考様式に属する思想家の一群が「精神層 (geistige Schichten)」、基礎志向が「世界意志 (Weltwollen)」ということになるだろう (WAW 372-387)。この場合、注意すべきであるのは、社会的階層・世代と精神層が、必ずしも厳密な相互決定関係にあるわけではない、ということである。つまり、同じ精神層に属するといっても、個々の思想家によって、所属する社会的階層あるいは世代が異なる場合が考えられる。この場合、個々の思想家の思想の色合いは、それぞれ異なったものになるだろう。また、逆に言えば、ある一つの社会的階層、あるいは世代において、いくつかの精神層（保守主義以外の精神層）が存在することも考えられる。マンハイムが、知識社会学において、存在と理念の関係を、「対応 (Entsprechung)」といった一見曖昧な術語で表すのも、現実の歴史の具体的な多様性を尊重しつつ分析を進めるためであろう。

#### IV. 自己反省としての歴史的・社会的分析

前章で述べたように、マンハイムは、メーザー、ミュラー、フーゴー、ザヴィニーといった思想家を中心として歴史的・社会的分析を進めていく。これらの思想家の叙述において特徴的であるのは、マンハイムが、自らの知識社会的思考の特質を彼らの思想の中に読み取っているということである。例えば、「動的思考」、「総合」、「自由に浮動するインテリゲンツ」、「存在拘束的思考」といったマンハイム自身の概念によって、彼らの思想内容・政治的立場が叙述される。

本章では、保守主義論の歴史的・社会的分析の内容、とりわけ社会的階層、世代体験に基づく分析の具体例を示すと共に、その成果が、同時に、マンハイム自身の自己反省の所産でもあるという事実を明らかにしていく。

##### 1. 「動的思考」、「総合」とA・ミュラーの思想

フランス革命後のドイツにおいて、官僚主義的絶対主義・合理主義の担い手が、王権、官僚等であったのに対して、封建的・身分主義的反動の担い手は、第一に、貴族であり、第二に、この運動の代弁者となったロマン主義的イデオログ、すなわち「社会的に自由に浮動するインテリゲンツ」であった。そして、オスナブリュックの貴族・参事官の息子であるJ・メーザー(1720-1794)が、古きものの素朴な擁護、「原保守主義」にとどまったのに対して、メーザー、バーク、初期ロマン主義の汎神論等の諸潮流を共に汲みつつ、ロマン化をより徹底的に遂行したのが、A・ミュラー(1779-1829)であった。<sup>16)</sup> ミュラーは、ブルジョア出身であり、マンハイムによれば、「生まれながらのイデオログ、ロマン主義者」である。彼は、メッテルニヒ、ゲンツの依頼を受け、自由に浮動するインテリゲンツ

として、貴族と身分主義的思考法を正当化する立場に立った。

当時、官僚主義的合理主義と共に、ブルジョア的合理主義は、体系としての思考、静的体系としての国家といった考え方を推し進めていた。これに対して、この考え方の克服を意図して生成してきた第一の道が、すべての思考を否認しその意味を否定して非合理的なるものに訴える歴史学派の考え方であり、第二の道が、静的思考と動的思考を区別するミュラーの考え方であった。ミュラーは、生き生きとした「動的思考」の中に政治的問題を解決する鍵を見いだしていた。動的思考は、非合理的なるものに訴えるのではなく、むしろ、啓蒙主義によって設定された合理的なるものの限界を押し広げる思考であり、それ故、理性の能力に対する信仰を捨て去るものではない。動的思考が排斥するのは、硬化した体系化を推し進める啓蒙主義的思考である。

マンハイムによると、ミュラーの動的思考を特徴づけるのは、「媒介」の概念である。ミュラーによると、歴史の中のある具体的状況は、普遍的法則の特殊事例として捉えることはできず、むしろ、互いに対立しあい、動的に変化する諸要素のその時々「動的総合」、媒介の所産である。従って、国家も、静的秩序として把握され得るものではなく、むしろ、生成し、運動する存在であり、様々な諸力の動的均衡という理念としてのみ把握される。以上のような「動的思考」においてミュラーが強調するのは、本来「内面から」のみ体験することのできる純粋な生成、まさに「生の概念」である<sup>17)</sup>。その結果、ミュラーは、実践においては経験から集積された感覚、直観的確実性を、また、政治的認識においては美的・芸術的契機を重要視する。

さらに、ミュラーにとって、媒介・総合を行う主体は、理論的・傍観的主体ではなく、決定し、判定する人間である。マンハイムによると、ミュラーにおいて、理論と実践の関係は次のように考えられる。「理論的主体が決定し、実践的主体がその決定を実行するというのではなく、具体的な

ものを把握するということが、それをともに生きる実践的主体の決定であり、媒介なのである。認識は行為であると同時に行為から生じた知である」(K 180; WAW 502)。また、「総合は、合成や総計ではなく、内面から生をともにしながら成し遂げられた媒介である」(K 181; WAW 502)。

以上の叙述から、ミュラーにおける静的思考と動的思考の区別が、IIで述べた、マンハイムにおける二つの思考の区別に符号するものであることは明らかであろう。また、マンハイムが、ミュラーにおける媒介、理論と実践に関する思想を、『歴史主義』における自らの総合の立場の先駆とみなしていることも明らかである<sup>18)</sup>。ただ、一つ注意すべきであるのは、「自由に浮動するインテリゲンツ」に関する記述である。周知のように、1927年の『イデオロギーとユートピア』において、「自由に浮動するインテリゲンツ」は、政治的総合という能動的な役割を担うものであった。それに対して、保守主義論における「自由に浮動するインテリゲンツ」は、おのれの目標を持たず、おのれ以外の社会的諸力に奉仕するという、本来、受動的な役割を担うものとして描かれている<sup>19)</sup>。

## 2. 「存在拘束的思考」とザヴィニーの思想

前節で論じた、メーザー、ミュラーらのロマン主義的・身分主義的立場は、結局、歴史そのものから逃避し、純粹に内面化された動的なるものの体験に向かう傾向を生み出した。しかし他方で、保守主義思考には、現実において生成している動的なるものを、歴史そのものの中に見いだそうとする二つの傾向が存在した。つまり、ヘーゲル、及び前述の歴史学派である。ヘーゲルが、しかし、計算的・抽象的合理性をより高次の動的な合理性(弁証法)によって克服したのに対して、歴史学派は、歴史的生、つまり、純粹に動的で非合理的なるものを世界現象の本質と見なし、いわばそのただ中に身を置こうとする。「歴史学派は、ロマン主義の中にある合理

的なるものの究極の残余をそれ故かき消し、世界現象の本質を非合理的なるものの中に求めるが、ただし、歴史学派は、これを非政治化したり、内面化したりせず、むしろ歴史の中に探り出そうとする」(K 186)。従って、歴史学派は、ロマン主義の非合理主義的傾向をよりラディカルに実行する。以上のような特徴を有する歴史学派の代表者の一人が、歴史法学派の F・V・ザヴィニー (1779-1861)<sup>20)</sup> である。

マンハイムによると、ザヴィニーの論述から、二つの思考の仕方の区別を読み取ることができる。一つは、普遍的・形式的な法に対応する、「抽象的思考」である。抽象的思考は、定義によって固定された概念を用い、形式的修養としての法を形成する、いわば、有機的なるものから分離された思考である。これに対してザヴィニーが重視するのが、慣習法に対応する、存在する法と結びついた思考、マンハイムによれば、「存在拘束的思考」、あるいは「ゲマインシャフト拘束的思考」である (K 192-194)。ザヴィニーによると、法は、民族の本質と性格に有機的に関連したものであり、民族とともに成長し、また衰退する。そして、この「民族の本質と性格」とは、言い換えれば、民族ゲマインシャフトの中のすべての個人及び客体化物の内に、「内的な必然性」をもって、潜在的・無意識的に作用している力である。従って、法学的正当性を有するものは、この力の内に、つまり、我々の背後にある無意識的・非合理的なるものの中にすでに存在している。<sup>21)</sup> そして、法を認識する主観もまた、その全体的人格においてゲマインシャフト的連関の内に係留しており、思考の機能は、このすでに存在している法を「解明する (klären)」こと、つまり、個々の具体的な事例から、すでに存在している法を内在的に首尾一貫した形で作りあげ、欠けている媒介概念をさしはさむことにある。思考は、すでに存在している法を解明するのみであって、法を新しく創造することはできない。

付言すれば、ザヴィニーは、後に、以上で述べた無意識的な力、「有機的な放射中心 (organisches Strahlungszentrum)」を、「民族精神」として

実体化する。マンハイムによると、ザヴィニーにおける「民族」の概念は、一方では、フランス革命に対抗して事実上生成してきた生き生きとした統一体の発見であると同時に、他方では、革命の要求に対する、貴族のための身分主義的なイデオロギー的防御を表すものである。ザヴィニーにおいて、「民族」の概念は、もっぱら文化的レベル（言語、慣習、芸術、法）のみを含むものであり、現実的というよりは、むしろ、ロマン化されている。

さて、以上の叙述から、ザヴィニーにおける「抽象的思考」と「存在拘束的思考」の区別が、IIで述べた、マンハイムにおける「伝達的思考」と「接続的思考」の区別に符号するものであることは、明らかであろう。次に、社会的階層に基づく分析の例として、マンハイムによる、A・ミュラー<sup>22)</sup>とザヴィニーの比較を見ておきたい。

A・ミュラーとザヴィニーの思想は、ともに、身分主義とロマン主義の総合を表している。事実、彼らはおなじ精神・生活ゲマインシャフト、具体的には、貴族、軍人、官吏、ロマン主義的芸術家・作家から成る「キリスト教・ドイツ食卓会」に属していた。彼らは、自然法の拒絶、旧身分的なるものへの感覚、歴史的なるものの強調といった点で共通している。しかし、ミュラーにとって、歴史が、諸身分間の実り多き永遠の争いであるのに対して、ザヴィニーにとって、歴史における実り多き契機は、無意識的なるもの発展が具体的な現実性において徐々に明らかになっていくという点にあった。ミュラーとザヴィニーの相違は、マンハイムによると、次のように把握することができる。「ザヴィニーが、身分主義的原理の静かなる抵抗を代表しているのに対して、ミュラーは、この精神のよりラディカルで純粋な反抗を代表している」(K 220)。ザヴィニーの出自はなるほど貴族であるが、彼は後に官吏（大学教授）となる。ザヴィニーの精神性は、いわば、「官吏の精神性の枠組み形式の内部で生き生きとなった身分主義・ロマン主義的心性」(K 222)と呼ぶことができる。官吏の精神性

は、古き伝統の保守へ向かうとはいえ、反動的ではない。それは、程々に進歩的であり、システム全体を変化させようとはしないが、システム内部の修正に常に心を向けるものである。それに対して、ミュラーは、上述のように、「自由に浮動するインテリゲンツ」であった。この立場から、彼は、合理主義に対する反抗により純粋にコミットすることができた。彼は歴史の車輪を中世へ向けて逆に回すことを望む程に反動的たりえた。

### 3. 世代の問題～M・ヴェーバーとマンハイム

前節で述べたザヴィニーの思想の目的は、「実定法」の高揚にあった。マンハイムは、この実定法の議論の、ザヴィニー以前の段階にさかのぼり、G・フーゴー (1764-1844) について論じている。<sup>28)</sup> フーゴーとザヴィニーは、歴史的なるものへの感覚、自然法に対する実定法の肯定という点で共通している。しかし、マンハイムによると、ザヴィニーと異なるフーゴーの思想の特徴は、「彼が (本来故意にではなく) 自然法によって実定法を相対化し、そして同時に、実定法によって自然法を相対化した」(K 206) という点にある。つまり、フーゴーは、一方で諸事象の実定性・歴史性を論拠として自然法を批判すると同時に、他方では、理性の要請からすべての歴史段階とその環境を相対化するという、精神的浮動状態にあった。このような浮動状態においてフーゴーは、歴史主義というよりは、むしろ、比較による歴史研究に向かった。

マンハイムは、フーゴーの精神的浮動状態から導き出されてくる彼の現実性概念を、「幻想なきリアリズム (Desillusionsrealismus)」と呼ぶ。マンハイムによると「幻想なきリアリズム」は、同じ歴史的な生活空間の中に、二つあるいはそれ以上の社会的階層が存在しており、それらに属する各々の世界観が、同等の重要性を持つものとして対置されているような歴史的段階において生じるものである。この段階においては、生活空間の中に存在するいくつかの世界観が互いに反目し合い、相互に相対化され、そ

の結果、人は、現実的に、幻想なしに思考することを意図するようになる。「ここでは、それ故、規範自由、ユートピアを欠いていることが、いわば、客観性と、リアリティーへの接近の基準となる」(K 210)。

マンハイムによると、この「幻想なきリアリズム」の最も重要な代表者がM・ヴェーバーである。ヴェーバーは、一方で、社会主義的立場からブルジョア的合理性を批判するが、他方では、ブルジョア的批判によって社会主義的ユートピアを相対化する。ヴェーバーにとって現実性は、互いに働きかけ合う諸傾向の相互止揚、つまり、決して終わることのない神々の闘争であった。<sup>24)</sup>

このような「幻想なきリアリズム」から、フーコーは、結局のところ、実践的には諦観の立場にあり、「今それがそのようにある状態」を肯定した。フーコーは、まったく法のない状態を回避する暫定的手段としての「慣習 (Gewohnheit)」を、しどろもどろ承認する。その限りにおいて不完全な現状も正当化される。フーコーの立場は、いわば、消極的に歴史的な立場であり、穏当な改良主義にとどまるものである。

さて、フーコーとザヴィニーを比較してみた場合、「ザヴィニーにおいては、フーコーにおいて慣習が立つ同じ場所 (いわば論理的に同じ場所) に、民族の »静かに作用する力« が、また、諦観の場所に、力強い、積極的に評価する、内容に満ちた体験が現れている」(K 213-214)。マンハイムは、ザヴィニーとフーコーのこの相違を、両者の世代体験の相違と対応させている。<sup>25)</sup> 1789年、フランス革命の年に、フーコーが25歳であったのに対して、ザヴィニーは、まだ10歳であった。精神的に最も感じやすい年頃に、フーコーがフランス革命を体験したのに対して、ザヴィニーは、イエナの敗戦、さらに、フランスの支配、解放戦争を体験した。従って、フーコーの世代にとって理論的な議論であったものが、ザヴィニーの世代にとっては現実的な議論となった。ザヴィニーの世代は、貴族を頂点とする当時の国民的反乱を通じて、「無意識的で創造的な力」を深く体験する

ことが可能である歴史的地点にあった。

以上のような世代の相違を、マンハイムは、彼が生きた時代に関して、重要視している。マンハイムによると、自己反省 (Reflexivität) と相対主義が不安を呼び起こす時代において、それが克服されるのは、理論的・内在的な道によって、あるいは、相対主義的に思考することをやめようとすることによってではない。相対主義は、「集合的運命」によって克服される。つまり、文化が世代と共に成長していくこと、若い世代が、新しい光を、新しく生成した内容に向けていくことに、マンハイムは、希望をつないでいる。<sup>26)</sup> マンハイムの心の中には、幻想なきリアリズムの世代であるフーコー、M・ヴェーバー、それに対する新しい世代であるザヴィニー、自分自身といった図式がイメージされていたのではないだろうか。

## V. 結 論

以上の論述で、マンハイムの保守主義論が、歴史的・経験的研究であると同時に、「知識社会学自体の基礎の自己反省」でもあるという事実が明らかになったことと思う。マンハイムは、身分主義・ロマン主義的思考、歴史学派、ヘーゲルの弁証法<sup>27)</sup>といった保守主義的思考に、知識社会学の源泉を見いだしていた。<sup>28)</sup>

ただ、本稿においては、何故マンハイムは自己反省に向かったのか、また、そこからどこへ向かうのか、という、より本質的な問題にふれることができなかった。この問題を論じる場合、『旧保守主義』前後の著作も含めて、マンハイムの思想展開をより包括的に検討することが必要とされるだろう。ここでは、ただ、暫定的解答のみを示しておきたい。『旧保守主義』を境として、マンハイムの関心は、時間軸上での歴史的総合から、空間軸上での社会的・政治的葛藤へと移行する。また、彼の自己反省の焦点は、知識社会学の背後にある動的形而上学から、同じくその背後にある政

治的实践への含意へと移行する。<sup>29)</sup>そして、この推移の帰結が、まさに、「政治論」としての『イデオロギーとユートピア』であり、また、「政治的」な自己定位、理念型的自己目標<sup>30)</sup>としての「自由に浮動するインテリゲンツ」ではないだろうか。

筆者は、マンハイムの思想過程を、自らの認識の基礎をたえず相対化しつつ進む、「自己反省の深化」の過程として解釈することができると考えている。確かに、マンハイムの諸著作には、彼自身も認めているように、矛盾、一貫性の欠如が見られる。しかし、逆に言えば、彼にとっては、論理的完結性、静的に固定された立場をとることよりも、むしろ、たえず自らに批判的なまなざしを向け、その結果を恥ずることなく公表すること、「自己の不完全さを補ってくれるものに対して開かれてあること (Offensein zur Ergänzung)」が、より重要であったのではないだろうか。また、さらに注目されるべきであるのは、マンハイムの場合、自己反省が、閉鎖的になることなく、むしろ、自らの生きる時代の歴史的背景、自らの生きる社会の状況へのまなざしと常に結びついていたという点である。このような視角からマンハイムの思想過程を新たに解釈することが筆者の今後の課題であり、本稿はその一環となるべきものである。

さらに、最後に付言するなら、マンハイムの保守主義論の二重性、つまり、経験的研究であると同時に、ある特定の状況に生きる研究者自身の自己反省でもある、という二重性<sup>31)</sup>は、実証主義が勢力を増し、経験的研究のみが重視されがちな現代の社会科学に対しても、一つの疑問を投げかけているのではないだろうか。保守主義論に限らず、マンハイムの議論は、このような二重性を有している。マンハイムの思想から我々が学ぶべきことは、まだ、汲み尽くされてしまったわけではない、と筆者には思われる。

注)

マンハイムの著作・著作集は以下のように略記した。

K: Konservatismus. Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens.

SD: Strukturen des Denkens.

WAW: Wissenssoziologie. Auswahl aus dem Werk.

ESSP: Essays on Sociology and Social Psychology.

K, SD については以下の英訳を参照した。

Structures of Thinking (1982), ed. D. Kettler, V. Meja, & N. Stehr; trans.

J.J. Shapiro & S.W. Nichol森. Routledge & Kegan Paul.

Conservatism (1986), ed. D. Kettler, V. Meja & N. Stehr; trans. E.R. King.

Routledge & Kegan Paul.

WAW については以下の邦訳を参照した。

榎 俊雄 (監修) (1975~1976) 『マンハイム全集 1~3』潮出版社。

- 1) 最近の例としては, Abercrombie (1980), pp. 47-51.
- 2) 保守主義論一般については, 半沢他 (1978), 北岡 (1985), 田村・田中編 (1982), 264-288頁。マンハイムの保守主義論は, 社会学においてよりも, むしろ, 政治思想史の分野において重要視されている。
- 3) 19世紀のドイツ政治思想一般については, 多田 (1981): とりわけ, 68~95頁。
- 4) ヴォルフも, マンハイムの保守主義論が「主観から客体への転換」を示すと述べてるとともに, それが, 同時に, 「マンハイム自身の世代の思考の解釈」になっていると述べている。Wolff (1971), pp. xli-xxvii. 及び, Wolff (1984), p. 72. また, 高橋 (1979) においても, 保守主義論において, 「やはり主要関心は知識社会学理論のよりいっそうの整合化」におかれていたと述べられている。42頁。
- 5) 『保守主義的思考』は, 現在, WAW, SS. 409-508 に収められている。また, その解説としては, 阿閉編 (1958) 所収の森博「保守主義論」参照。
- 6) 『英語版』は, 現在, ESSP, pp. 74-164 に収められている。
- 7) SD の解説としては, Kettler (1967), Kettler, Meja & Stehr (1982; 1984), Loader (1985)。
- 8) エディンバラ学派のブルアは, マンハイムの保守主義論に依拠しつつ, 啓蒙主義的イデオロギーとロマン主義的イデオロギーの対立について述べている。彼によると, 現代科学哲学の場合も, ポパーが前者に, クーンが後者に属するも

- のとな見なされる。Bloor (1976) 訳, 74-113 頁.
- 9) 言うまでもなく、マンハイムは、資本主義に対する政治的・社会的抵抗のもう一つの担い手としてのプロレタリアートの思考についても述べている。(K 83-91).
  - 10) 19世紀のドイツ史一般については、Mann (1958).
  - 11) SD に収められている『文化社会学的認識の特性について』(1922) で、マンハイムは、生と体験の総体性としての「社会的体験連関」について述べている。マンハイムによると、この体験連関を把握する際には、日常生活における「直観」を純化し論理的操作の次元にまで高めること、つまり、体験連関の構造を把握し、その構造を「世界観概念」として定式化することが必要とされる。この意味で、マンハイムは、「直観主義と論理主義の中道」を行くと述べる (SD 59-93).
  - 12) この区別を、マンハイムは、M・ヴェーバーの理解社会学から借りてきている。また、マンハイムが、基礎志向、思考様式を解釈する方法は、一種の理念型的方法と見なされるだろう。Maquet (1951), pp. 37-42.
  - 13) マンハイムの知識社会学と解釈学の関連については、Hekman (1986), Simonds (1975; 1978).
  - 14) 山口 (1982), 133-174 頁.
  - 15) K 247-248. Anm. 130.
  - 16) A・ミュラーについては、Schmitt (1919). とりわけ、訳 29-66. 147-217頁。マンハイムとは対照的に、シュミットは、ミュラーに対してきわめて批判的である。シュミットによると、ミュラーは、美辞麗句をつくし、あらゆる対立を主観化してとらえ、「より高き第三のもの」へと逃避し、実践的に自己決断を行おうとしない。マンハイムによると、シュミットは、ミュラーの思想の「動的要素」を正当に評価していない。
  - 17) マンハイムによると、この「生の概念」は、一方では、ロマン主義的傾向においてますます内面化・非政治化され、「純粹体験」の内に真の存在を求める生の哲学(ベルグソン)、さらには現象学派、歴史主義(ディルタイ)に受け継がれ、他方では、ヘーゲルの弁証法へと結実し、さらには、マルクスへと到った。
  - 18) 保守主義論においてマンハイムが、「媒介」と「総合」の概念を区別して用いているとは思えない。しかし、『有機体としての国家概念の歴史：一つの社会学的分析』では、ミュラーの場合、定立と反定立が「総合」によって完結することではなく、むしろ対立する諸傾向のたえざる「媒介」が問題となる、と述べら

- れている (ESSP 174-178).
- 19) インテリゲンツに関するマンハイムの議論の推移については, Heeren (1971).
  - 20) F.v. ザヴィニーについて, 簡潔には, 伊藤 (編) (1985), 9-15頁. より詳細には, 河上 (1978), とりわけ, 417-458, 513-520 頁.
  - 21) マンハイムによると, ザヴィニーにおける「無意識的なもの」の思想史的源泉は, シェリングにある.
  - 22) ミュラーとザヴィニーの相違について, マンハイムは, 世代に基づく分析も行っている (K 220).
  - 23) フーコーについては, 小林 (監訳) (1980) 132-135 頁.
  - 24) 相対性が原則としては乗り越えられ, 積極性 (Positivität) への志向が存在してはいるが, いまだこれが充足されていない「浮動状態」を, 運命として耐える態度を示す例として, SD では, M・ヴェーバー, ヤスパースがあげられている (SD 188).
  - 25) ザヴィニーとフーコーの相違について, マンハイムは, 社会的階層に基づく分析も行っている (K 215-216).
  - 26) このように見ると, マンハイムの『世代の問題』(1928) もまた, 自己反省的性格を有していることが理解されるだろう.
  - 27) 前述のように, 『旧保守主義』の末尾において, 保守主義的思考の第三の類型としてのヘーゲルに関する詳細な分析が予告されてはいるが, 結局, 具体化することはなかった.
  - 28) スタークもまた, 知識社会学の源泉を, ヘルダー等の保守主義者の内に見いだしている. W. Stark, "The Conservative Tradition in the Sociology of Knowledge." In Remmling (ed.) (1973), pp. 68-77.
  - 29) Loader (1985), pp. 66-94. Kettler, Meja & Stehr (1984).
  - 30) J. Gabel, "Is Nonideological Thought Possible?" In Stehr & Meja (ed.) (1984), pp. 25-33.
  - 31) ケトラー, メヤ, シューテルらは, マンハイムの思想における二重性を, 一方でM・ヴェーバー流の経験的研究, 他方でヘーゲル流の形而上学, ルカーチ流のマルクス主義の間で浮動する, マンハイム自身の志向の両義性としてとらえている. Kettler, Meja & Stehr (1986),

#### 参 考 文 献

Abercrombie, N. (1980): *Class, Structure and Knowledge: Problem in the Sociology of Knowledge*. Oxford.

- 阿閉吉男 (編) (1958): 『マンハイム研究』 勁草書房.
- Bloor, D. (1976): *Knowledge and Social Imagery*. (佐々木・古川訳『数学の社会学』 倍風館, 1985).
- 半沢・三辺他 (1978): 『近代政治思想史 (3) 保守と伝統の政治思想』 有斐閣.
- Heeren, J. (1971): "Karl Mannheim and the Intellectual Elite." *British Journal of Sociology*, vol. 22, pp. 1-15.
- Hekman, S. J. (1986): *Hermeneutics and the Sociology of Knowledge*. Cambridge.
- 伊藤正巳 (編) (1985): 『法学者 人と作品』 日本評論社.
- 河上倫逸 (1978): 『ドイツ市民思想と法理論』 創文社.
- Kettler, D. (1967): "Sociology of Knowledge and Moral Philosophy." *Political Science Quarterly*, vol. 82, pp. 399-426.
- Kettler, D., V. Meja & N. Stehl. (1984): *Karl Mannheim*. London and Chichester.
- (1982): "Introduction: Karl Mannheim's Early Writings on Cultural Sociology." In *Structures of thinking*. London.
- (1986): "Introduction: The Design of Conservatism." In *Conservatism*. London.
- 北岡 勲 (1985): 『保守主義研究』 御茶ノ水書房.
- 小林孝輔 (監訳) (1983): 『ドイツ法学者辞典』 学陽書房.
- Loader, C. (1985): *The Intellectual Development of Karl Mannheim: Culture, Politics, and Planning*. Cambridge.
- Mann, G. (1958): *Deutsche Geschichte des 19. und 20. Jahrhunderts*. (上原訳『近代ドイツ史 I』 みすず書房. 1973).
- Mannheim, K. (1984): *Konservatismus: Ein Beitrag zur Soziologie des Wissens*. hg. von D. Kettler, V. Meja & N. Stehr. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- (1980): *Strukturen des Denkens*. hg. von D. Kettler, V. Meja & N. Stehr. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- (1970): *Wissenssoziologie: Auswahl aus dem Werk*. hg. von Kurt H. Wolff. Neuwied: Luchterhand.
- (1953): *Essays on Sociology and Social Psychology*. ed. P. Kecskemeti. London: Routledge & Kegan Paul.
- Maquet, J. (1951): *The Sociology of Knowledge: Its Structure and Its Rela-*

- tion to the Philosophy of Knowledge*. Boston.
- Remmling, G. W. (ed.) (1973): *Towards the Sociology of Knowledge: Origin and Development of a Sociological Thought Style*. London.
- Schmitt, C. (1919): *Politische Romantik*. (橋川訳『政治的ロマン主義』未来社, 1982).
- Simonds, A. P. (1978): *Karl Mannheim's Sociology of Knowledge*. Oxford.
- \_\_\_\_\_ (1975): "Mannheim's Sociology of Knowledge as a Hermeneutic Method.", *Cultural Hermeneutics*, vol. 3, pp. 81-104.
- Stehr, N. & V. Meja (ed.) (1984): *Society and Knowledge: Contemporary Perspectives in the Sociology of Knowledge*. New Brunswick and London.
- 多田真鋤 (1981): 『近代ドイツ政治思想史』南窓社.
- 田村・田中 (編) (1982): 『社会思想辞典』中央大学出版局.
- 高橋 徹 (1979): 「マンハイムとオルテガ」『世界の名著 68. マンハイム・オルテガ』中央公論社. 5-92頁.
- 徳永 恂 (1968): 『社会哲学の復権』せりか書房.
- Wolff, K. H. (1971): "A Reading of Karl Mannheim." Introduction to *From Karl Mannheim*, pp. xi-cxxiii.
- \_\_\_\_\_ (1984): "Karl Mannheim: an Intellectual Itinerary." *Society*, 21, pp. 71-74.
- 山口節郎 (1982): 『社会と意味 メタ社会学的アプローチ』勁草書房.